

Title	一般化された他者と環境としての他者： 精神分析的視点は、「社会的自我論」に何をもたらすか
Sub Title	
Author	長尾, 真理(Nagao, Mari)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2006
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.11 (2006.) ,p.82- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20060000-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一般化された他者と環境としての他者

—精神分析的視点は、「社会的自我論」に何をもたらすか—

Generalized Other and Environmental Other

- Psychoanalytical Exploration of “Social Self” -

長尾真理

はじめに

本稿の目的は、社会科学の基礎理論とされてきた G. H. ミードの「社会的自我論」を再検討すると共に、「対象関係論」として知られる D. W. ウィニコットの精神分析的視点を導入することをおして、「社会的自我論」の新たな展開の可能性と今日的意義とを明らかにすることにある。それはまた、私たちが生きるこの混沌とした時代において、学際的な視座に依拠しつつ「社会科学」の再生への道を探るための、ひとつの試みでもある。

1. G. H. ミードと変貌するアメリカ

(1) ヨーロッパ的精神とアメリカ的精神 ——ミードと弁証法的認識関心

プラグマティズムの哲学者であり社会心理学者でもあったミード (G.H.Mead 1863-1931) は、またドイツ哲学、とりわけヘーゲルの観念論に関心を持ち、アメリカにおいて自らの社会理論の構成にいち早く弁証法的な認識了解を取り入れた思想家としても知られている。ハーバード大学での学生時代、ロイス (J.Royce 1855-1916) からの影響であったと言われていたが、更にその後のドイツ留学 (1888-1891 年) は、ミードにとって将来の方向を決定するうえで大きな出来事となった。ところでミードが留学した当時、ドイツはプロシアを中心とした立憲君主国家としてようやく統一を果たして (1871 年) まだ間もない時期にあった。しかし、都市部における急速な産業の発達を背景としながらも、政治的にはなお封建的な体制が残存し、またイギリスやフランスなどに比べて市民層の成熟が遅れるなど、ドイツ国内には多くの不安定な要因を抱えたまま、実質的には近代国家の成立とは名ばかりの状態にあった。しかし他方では、困難な社会問題の解決を目指して労働運動が活発化し、また社会主義政党が急速に進出するなど¹⁾、社会問題に対する新たな政策の実現が模索されている時期でもあった。このように、留学先のドイツにおいて社会が大きく移り変わる様相を目の当たりにしたミードは、自らもまた社会改革の運動に実践的に関わることを決意する。周知のとおり帰国後 1894 年、デューイ (J.Dewey 1859-1952) とともにシカゴ大学に移籍したことをきっかけに、ミードはシカゴ・コミュニティでの社会活動を開始し、その後死の直前にシカゴ大学を退くまで、一貫してコミュニティとの関わりを持ち続けることとなった。いうまでもなく、ミード

にとってこれらの活動は、社会改革を目指すプラグマティストとしての実践的営為に他ならなかったのである。

ところでミードは最晩年、倫理学の国際雑誌に寄せた論考「アメリカ的状况における、ロイス、ジェームズ、デューイの哲学」(1929-1930年)において、ロイスの理論に一定の評価を与えながらも、ドイツ社会で構成された観念論をアメリカ社会の分析に援用することの問題点を指摘している。ここでミードが問題とするのは、観念論的思考によって個人と社会との関係を解き明かすための要件である。ミードはその要件として、まず「自我がより大きな社会的全体と同一化するまでに純化されて(傍点引用者)」いること、そして当該の「人格が従属」すべきコミュニティには、なお「封建的な社会の組織化が存続している」こと(Mead 1929-1930:381=2003:244)という、以上の二点をあげたのであった。これは言うまでもなく、ミード自身が理解した19世紀前半におけるドイツの社会状況、すなわち「ドイツの統一」を掲げ高い理想を目指すドイツ国民の精神的な有様とともに、当時のドイツ社会が現実を抱える問題状況とに対応している。かつて留学した折、理想を掲げて社会変革を目指す人々の高揚感とともに、彼らが乗り越えるべきドイツ社会の封建的な体質を直に体験したミードにとって、ヨーロッパの思想を、それとは社会的背景を異にするアメリカという土壌の中に無媒介に適応させようとするロイスの主張は、明らかに受け容れ難いものであった。ミードが見るところに拠れば、アメリカ人の精神的特質は「アメリカ的個人の自己意識」、すなわち「個人主義」にある。したがって、アメリカ人は「自分が社会から生じたものとは考えておらず、また自分自身に沈潜することによって、社会の性格を把握することができるとも考えてこなかった」、とミードは指摘する。更に、こうした「ヨーロッパとアメリカの(精神的)生活のあいだの際立った違い」についてミードは、ヨーロッパ社会における社会主義運動の展開が端的に示しているように、「ヨーロッパでは革命や再構成が相次いで進行していたのに対して、アメリカ革命以降、アメリカの制度は意識的に再構成されることがなかった」という事情と関連しているのではないかと考えていた(*ibid.*:380-381=242-245)。したがってミードの理論的課題は、本来ヨーロッパ社会に由来するヘーゲルの観念論、とりわけ彼の弁証法の持つ社会変革的な意義を最大限に生かしつつも、それをいかにして「個人主義」的傾向の強いアメリカ社会へと適用し、さらにはアメリカのコミュニティでの社会改革と再構成とに結びつく理論として彫琢することができるか、という点に向けられていたといえるだろう。それは同時に、自我を構成する社会過程の中にすでに存在し、「自我のまわりに組織化されているリアリティの構造」を解き明かす作業とも連動するものであった。後に明らかにするように、そこには「民主主義」をラディカルに徹底させようとするミードの意図がうかがわれる。そして以上の観点からなる理論的成果を、「プラグマティズム的行為論に依拠した弁証法の再構成」とでも呼ぶべきミードの社会理論、すなわち彼の「社会的自我論」のなかにも見てとることができる。

(2)「社会的自我論」の展開 ——ミードと民主主義の系譜

1) 客体としての自我

すでに指摘したとおり、個人と社会との関係を解明するにあたってミードが基本に据えていたのは、人間は社会の中で他者との関係をとおして共同体の成員として育て上げられていく存在であること、そしてまた、それゆえにこそ自己の存在を賭けて社会と切り結ぶべき存在でもあること、このような人間観であった。したがってミードの「社会的自我論」では、自我が社会的に構成される側面とともに、自我が社会に対して主体的に働きかけ新たな局面を切り開いていくという、自我の相反する位相が追究されることになった。いうまでもなく、これらはミードによって、それぞれ「I」と「me」と名付けられた自我の側面にあたる。しかし、その発生過程においてもまたその理論的な位置づけにおいても、双方は対等な関係にあるわけではない。すでに指摘したとおり、ミードの主たる課題は、「個人主義」的な精神的土壌を持つアメリカにおいて、いかにして人々が所属する共同体と同一の価値観や行動様式を獲得しうるのであるのか、という問題を解明することにあつた。したがってミードが重視するのは、あくまでも社会的に構成される社会的な客体としての自我、すなわち「me」の側面である。ミードはこれを、他者との社会的な相互行為において、様々な他者の役割を取り入れる過程をとおして形成される自我の側面である、と説明する。そしてこの「他者の役割取得」を可能とするのが、同一の論理を共有するひとつの「意味世界」でもある共同体において、「自分が他者に呼び起こす反応と同じ反応を自分自身のうちに引き起こす」(Mead 1925:285=1991:60) という、ミードの自我論を貫く基本的メカニズムなのである。他者の行為の反復と受容といった、基本的にはいわゆる「模倣」行動に基づく相互の適応メカニズムに依拠することによって、個人は所属する共同体の中で、本質的に「自分とは異なる他者」の立場に立つことが可能となる、とミードは考えたのであった。

ところで、社会的自我の発生過程において、すなわち子どもの成長過程において最初に彼等とかかわるのは、いうまでもなく母親や家族といった特定の「具体的な他者」たちである。しかし、成長するにつれて彼等の世界は次第に広がっていく。ミードがとりわけ重視するのは、「ゲーム」にかかわる段階であった。不特定多数の参加者によって構成されるゲームでは、常に参加者全体の中での個人の役割が決定され、一定の規則に基づく行動が要求される。つまりゲームの参加者は、他の参加者すべての多様な役割を取り入れ、さらにそれらを組織化していることが求められる。子どもはこのことを、実際のゲームへの参加をとおして習得していくことになる。そして、このゲーム過程におけるいわば「多様な他者」の役割取得の延長上に、ミードは彼等が所属する「より大きな」社会、すなわち共同体の存在を位置づけるのである。しかし、個人が共同体の成員として認知されるこの最終段階に至っても、ミードはなお、成員間の反応の同一性を保障するのは特定の意味世界を前提とした「同じ反応を引き起こす」とされる先の基本的メカニズムである、とみている。ミードはさらに次のように続ける。この共同体において「組織化された反応は、子どもの行為を伴い、またコントロールする「一般化された他者」と私が呼んできたものになる。そして子どもの経験におけるこの「一般化された他者」が、子どもに自我を与える (*ibid.*:285=60-61)」のである。

「一般化された他者」とは、ひとつの共同体における「複数の他者」を統括する、いわば「普遍的な他者」である。そして共同体の総意を自我のうちに内在化させようこの段階に至って、ミード

が最終的に目指した自我、すなわち「社会的全体と同一化」された自我が、ひとまず成立をみるのである。しかしここにおいて再び先の問題が浮上する。それでは、「社会的全体」を貫く一定の論理、言い換えるならば、そこにおける規範の実質的な方向性とそれに対する自我の反応との同一性は、そもそも何によって保障されるのだろうか。ミードは、自我の獲得にあたって決定的な役割を果たすこの普遍的な媒体の役割を、人間社会に特徴的な「有声シンボル」、すなわち「言語」の機能の中に見出そうとする。話し手と聞き手双方にとって同一の意味、すなわち同一の方向性をもった反応を含意する言語の獲得は、確かに「社会的全体と同一化」する自我の成立にとっては不可欠な要件であるに違いない。しかし、特定の言語構造に規定された世界は、また所属する成員に対して「人格的な従属」を求める社会的な調整と統合の場でもある。すなわち、「同一の反応を呼び起こす」というミードの基本的メカニズムに依拠する限り、自我を獲得し特定の共同体の成員となることは、すなわち歴史的文化的に規定された特定の意味世界の論理に基づく言語共同体の成員となることを、同時に意味しているのである。ここではひとまず、この点に留意しておきたいと思う。

さて、ミードによる社会的自我の成立過程を以上のように整理するならば、「一般化された他者」の態度を取得したところに成立する「me」の側面も、また社会的なコントロールを内在化した行為調整と統合の場といった、過度に社会化され規範性の強い性格を帯びることになる。たとえ「一般化された他者」のうちに、具体性を備えた多様な「複数の他者」たちが内包されていたとしても、「一般化された他者」が指し示すのは、あくまでも特定の意味世界の論理によって貫かれた共同体としての総意に他ならないからである。それでは以上の特質をもつ「me」に対して、対象へと積極的に働きかける、人間の主体的存在を象徴するとみなされた「I」の側面は、ミードによってどのように論じられてきたのだろうか。

2) 主体としての自我

ミードの「社会的自我論」において「me」とともに持ち込まれた「I」という概念は、しかし周知のとおり、「me」の場合とは異なり、ミード自身による明確な定義づけや解説のないまま今日まで議論の多い概念となっている。ミードによれば、「I」とは確かに自我の「主体」を担う構成要素とされてはいるが、しかし自己自身と一致しうるものではなく、したがって自己を全体として意識し統括したり、あるいは反省的な認識主体となりうる存在でもないと考えられている²⁾。次にミードによる「I」の解説にしたがいながら、ひとまず「I」の特質を整理しておくことにしよう。「自我は、意識のうちに「I」として現れることはできない。自我は常に対象として、すなわち「me」として現れるのである」(Mead 1913:142=1991:1)。「すなわち、知覚することができるのは、経験的自我すなわち「me」だけである。「I」は直接経験の範囲を超えている。「したがって「I」は、意識における対象としては決して存在し得ない (Mead 1912:140-141=2003:40-41)」。さらにミードは続ける。「自我が他者に対して働きかけを行い、また周りの対象を直接的に意識する。そしてまた、自我が記憶において、働きかける自我と働きかけられる他者とを復元するのである(傍点引用者)」。この時「I」は、自我の背後に常に含みこまれているのである (Mead 1913:144-145=1991:6-7)。以

上の説明からもわかるように、「I」の側面を説明しようとした途端に、ミードの語調はあいまいさを帯びてしまうのである。それはあたかもミード自身が、「I」の側面を「社会的自我」のうちに積極的に位置づけることを放棄しているかのようにも見える。

ミードにとって当初の問題設定、すなわち「個人主義」的な傾向をもつアメリカ社会において、社会的に構成されると共に社会に働きかけ、社会の再構成を図る自我はいかにして形成されるか、という問題を分析、解明する過程において、「主体」を象徴する「I」の側面は、理論構成上からみても確かに不可欠な存在であったろう。その意味では、「同一の反応を引き起こす」という一連の過程が含意する「身体的な所作に基づく意味作用」といった点に注目しつつ、そうした意味作用を担う「反応する主体」、あるいは「反応する身体」として「I」を位置づけることも可能となろう³⁾。あるいは先の「記憶」というミードの言葉に注目するならば、意識的であるか否かを問わず、記憶それ自体をつかさどる役割を「I」の側面に結びつけることも、また可能となるであろう。しかしいずれにせよすでに指摘したとおり、ミードは「社会的自我論」の展開過程で、自我を特定の共同体内における「言語」に媒介された反省的な過程として捉えることによって、従属が求められるべき社会共同体と言語共同体とを等価に置くこととなった。したがってそこでは、個人は社会の変革や再構成の担い手の座からは排除されざるをえない。なぜならば、特定の規範構造に基づく言語体系は、そこに所属する個人に先立って常に、そして既に存在するからである。だとするならば、ミードの「社会的自我論」のうちに託された社会的変革や再構成は、いったい誰の手によって担われるのだろうか。そして、どのように遂行されていくのだろうか。以上の問題を解明するために、ここで再び「自我がより大きな社会的全体と同一化するまでに純化されていること」という、先のミードの言葉を手がかりとしながら、さらに検討をすすめていくことにしよう。

3) 社会的自我

1925年に著わした論考の中でミードは、複雑化する国際社会において、人々が所属する特定の共同体を越えて相互に理解しあうことの重要さと共に、その難しさの理由を次のように述べている。「なぜならば、それは単に時間、空間、言語の違いという外的な障害を取り除くだけではなく、自我が組み込まれている習慣や地位に関する固定した態度を打ち破ることをも含んでいるからである。いかなる自我も社会的自我である。したがって、自我はそれが役割取得する集団に制約されている。そしてこの[制約された]自我が放棄されるのは、それ自体がより大きな社会(傍点引用者)のなかに入り込み、そこにおいて自己を維持していく」ことによつてのみなのである(Mead 1925:292=1991:73)。さて、この「より大きな社会」とは、個人が実際に所属し自我獲得の基盤となった共同体とは、明らかに異なる社会を指している。事実、この時ミードの念頭にあったのは、「国際連盟」(1920年設立)や「国際司法裁判所」(1921年創設)といった、一定の理念の下で設立され国際的な紛争の解決を目指す諸機関の存在であった。ミードは第一次世界大戦後の混迷する国際状況の中で、敵対し対立する利害関係にある人々が社会の改善を目指して「共通の基盤に到達する」ためには、互いの立場に身を置き、相互に「他者の役割」を取り入れることをとおして、お互いの

行為を共同でコントロールすることが急務である、と説いている (*ibid.*:291-293=71-74)。ここでミードが描くのは、その時代に固有な問題群を解決するために、それらと真摯に向き合い解決していく過程をとおして、自我自体も常に修正されながら新たな方向付けが与えられていくという、そうした自我のあり方である。言いかえるならば、ミードにとって自我とは、単に社会化の過程で所属する共同体の価値観を内面化することによって形成されるだけにとどまらず、人生の全般をとおして常に社会に対して開かれた可塑的存在であり続ける、ということである。つまり個人は、「一般化された他者」の役割取得を経て自我を獲得したその後も、更に「より大きな社会」の中に自らを位置づけることをとおして常に変化し、また再構成され続けるのである。なぜならば、ミードにとって現実とは、人々が現在置かれている、まさにその状況の中にこそ存在するからである。そして、新たに出会う「他者」との関係をとおして形成された新たな現実^{リアリティ}に対応すべく、自我の再構成を図る役割を担うのが「精神 mind」の働きに他ならないと、ミードは考えたのであった。したがってミードにとっては、社会の再構成と変革の担い手は「I」ではなく、あくまでも「me」の側面に、すなわち自らが所属する共同体を基盤としながらも、常により「上位」に位置する共同体との同一化を果たしうる「me」のもとへと託されることになるのである。

このようにミードの「社会的自我論」は、ミード自身が生きた時代の社会状況と密接に関連を持ちながら展開されている。言い換えるならば、ミードの理論には、その時代と切り結ぶミード自身の姿が鮮やかに映し出されている。国内における階級的な対立をも含めた様々な利害関心の衝突、更には19世紀から20世紀初頭にかけてのナショナリズムに端を発する多くの国際紛争をまえにして、ミードは、「争いの基盤」はまた「解決の基盤」でもあると考えていた。晩年の論考の中には、内外の政治的諸問題に関するこうしたミードの主張が随所に現れている。「理性的な態度とは、この分離や争いの背後にどのような共通の諸価値」すなわち「普遍的な利害関心」があるかを見出すことである。「文明化の過程とは、私たちの共同体では、社会的な組織化の基礎となるような共通の諸目的を見出すことなのである (Mead 1929:365-366=2003:180-181)」。さて、こうした問題の解決を図るためにミードが「より大きな社会」の更なる延長上に描いたのは、「討議の世界 universe of discourse」と呼ばれる仮想の世界であった。ミードにとってそこはすなわち、「実際の社会構造からは様々な度合いで抽象化され」、「理性的な手続き」によってのみ導かれた「理想的世界」であり、いわば社会進化の最終段階として想定された世界でもあった。しかし、ミードにとってそれはまた、理論上に組み立てられた単なる仮想の世界ではない。それは彼が描き出す「社会的自我」の特性を持ってすれば、少なくとも到達不可能な世界ではないと思われたからである。「このより広い共和国の成員」、すなわち「社会の理性的な成員」としての行為を保障しうるのは、いわば「理性性」に基づく新たな社会秩序への同一化である。この時、「理性的な交渉」の場においてその成員に共有されているのは、実際の政治的・経済的・文化的な諸価値から免れ、したがって「より広い共同体」の諸価値と結びついた「善」なる意識に他ならない、とミードは考えていた。だとするならば、対立や紛争の争点が常に国際社会における「理想的な交渉の場」に拓かれていることこそが、問題解決への唯一の要件となるはずである。このように、「理想的な交渉の場」が、すべての成員の「共通善」

に基づいて「より広い共同体の諸目的と、個人の諸目的とが同一化できるようになる (傍点引用者) (*ibid.*:370=186)」まさにそのところに、ミードは理想的な「民主主義」社会の実現を見定めようとしたのであった (Mead 1930:402-407=2003:223-229)。ここにミードの理想主義的、あるいは楽観主義的傾向を指摘するのはたやすいことであろう。しかし、コミュニティにおける労働問題や教育改革に深く関わり、苦闘し倒れたミードが、「変動する社会」という現実的要因を常に理論の中心に据えながらも、一貫して自らの希望を「理性」や「善」といった、いわばすべての人々に可能性として具わった「資質」のうちに託していたという事実はまた、ミードの理論を解明するうえでも興味深いところであると思われる。

さて、ミードの「社会的自我論」を以上のようにまとめてみると、理論の背後に網の目のように張り巡らされた弁証法的な認識了解が、彼の理論に対していかに多彩なダイナミズムを与えているかが明らかとなる。それは様々な位相における諸関係のなかで、常に移行や変化、あるいは変動といった動態を捉えるための理論的原動力となっている。そのことは、ミード自身が机上の抽象的な作業のうちに自らを留めるのではなく、常に実践的な活動をとおして社会変革やその再構成と関わろうとした、その「ラディカル」な姿勢と深く結びついている。そしてそのことがまた、プラグマティズムの運動が内包するラディカルな「民主主義的エートス」を具現化する思想家の一人として、ミードを位置づける根拠ともなっているのである⁴⁾。しかし、当時のシカゴ・コミュニティの状況を含めて 20 世紀初頭のアメリカ社会の急速な発展とそれに伴う深刻な社会的混乱、そして何よりもミード自身の周辺で起こった「反動的」とも言える「揺り返し」は、おそらくミードに対して、別の理論的選択の余地や他の理論展開の可能性を許すものではなかったのであろう。こうしてミードの理論展開に多彩なダイナミズムを与えてきた弁証法的な認識了解は、多様な方向性を持つ諸要素を「同一化」と「統合」の旗印のもとへと収束させることにおいて、「同一性の原理」へと一面的に切り詰められる結果となったのである。

2. 「同一性」の原理 と「否定弁証法」

ところで、カール・シュミット (C.Schmitt 1888-1985) を引き合いに出すまでもなく、「同一性」の原理は民主主義的な正統性を語るうえで、重要なメルクマールの一つとして受け容れられてきた。しかし、共同体を統合する役割を果たすこの「同一性」の原理は、他方では「集合的なアイデンティティ」という用語が意味するところからも明らかなおろ、成員間の「同一性」や「同一化 (= 同化)」を引き出すのと同時に、常にその中にある多様性、すなわち「異質な他者」たちを「同一性」の圏域外へと分断し、抑圧ないしは排除する表裏一体のメカニズムとしてもまた機能してきた。その意味では、「同一性」を存在の根本原理として据える社会は、たとえそれがどのような形態をとるにせよ、自らのうちにある排他的かつ閉鎖的な傾向を免れることは不可能となろう。そしてこの問題は、ミードが想定した社会共同体にも同様に当てはまる。たとえばミードの「社会的自我論」の重要な概念の一つである「一般化された他者」とは、一つの共同体における複数の他者を統括する「普遍的な他者」として位置づけられていた。しかし、以上の観点に立つならば、「一般化された他

者」によって代表されているのは「共同体[全体]の声というよりも、むしろ共同体に代わって語り、共同体の内部で権力をもつ人々の声 (Crossley 1996=2003:126)」だとも言えるのである。そのことはすなわち、「一般化された他者」の役割取得をメルクマールとする「社会的自我」の成立過程は同時に、所属する共同体の論理や価値観にそぐわない様々な要素をいわば「内なる異質な他者」として分断し、自己の外部へと「排除」し、あるいはまた自己の内部へと「抑圧」していく過程でもあることを意味している。

ところで、自我の獲得に至る社会化の過程を、「外的な強制の刻印」として明確に位置づけたのは、フランクフルト学派を代表する思想家の一人アドルノ (Th.W.Adorno 1903-1969) であった。アドルノは、その特質をもってさらに、「自己を社会的権威と直接同一視するメカニズム (Adorno 1951=1979:85)」であると断言する。『権威主義的パーソナリティ』(1950年)の著者の一人でもあるアドルノの思想の背後にあるのは、いうまでもなくナチズムの体験であった。「アウシュビッツのあとで」と題した断章の中で、アドルノは次のように語っている。「民族の抹殺は絶対的な統合である。人間が画一化される場所では、どこであれこの絶対的な統合が用意されている。…純粋な同一性は死であるという哲学的命題の正しさをアウシュビッツは証明している (傍点引用者) (Adorno 1966=1996:439-440)」。

とはいうものの、もちろんアドルノは「同一性の原理」を全面的に拒否しているわけではない。たとえば、思考とはそもそも「対象をその本質において同一化すること」に基づいて成立するのであり、また市場のメカニズムを支える交換原理も「同一化原理の社会的モデル」であるとアドルノはみている。しかし、この点を認めただけで、アドルノはなお「同一性」の側ではなく「同一ならざるもの」、すなわち「非同一性」の側に踏みとどまろうとする。なぜならば、この「非同一的なるものを解放し、さらにそれを精神化された強制から脱出させること」において初めて、「同一性」の圏域外に不当に排除された「多様性を心に留めること」、すなわち不当に貶められたものの「救済」が可能となると、アドルノは考えたからである (*ibid.*:012)。

しかし「同一性」の観点からみるならば、「非同一的なるもの」とは明らかに「矛盾」を意味し、また哲学的観点からみるならば、それは一義的には定義しえない、いわば「語りえないもの」の領域へと押しやられるべき存在となる。なぜならば、定義するという行為自体がすでに、特定の概念のもとへの対象の「同一化」を含み込んでいるからである。だとするならば、そもそもアドルノが目指した「語りえないものの救済」とは、いかにして可能となるのだろうか。実のところアドルノにとって、その可能性を探る「場」もまた矛盾の中に、すなわち「非同一性」の中にある。というのもアドルノは、「非同一的なるもの」の中にも、何がしかの「構成的性格」が組み込まれている、とみているからである。それをそのつど、そこで生じている事態に即して特定の脈絡の中で洞察すること。そしてその洞察をとおして「同一性の強制」からの解放の道筋を探っていくこと。これが、アドルノの選ぶ唯一の方法であった。このように、「概念的志向の向きを変え、それを非同一的なるものに向け変える (*ibid.*:020)」ための認識了解こそが、アドルノにとっての弁証法に他ならない。そしてアドルノはこれを「否定弁証法 Negative Dialektik」と名付けたのであった。

先にも指摘したとおり、「非同一性」に固執するアドルノの思想の中には、ある時には「同一化 (= 同化)」を強いられ、また或る時には人間としての生きる権利を剥奪されてきたユダヤ人の歴史が、色濃く反映している。しかしいうまでもなく、アドルノの思想が浮かび上がらせるものは「ユダヤ人問題」ひとつにとどまるものではない。「否定弁証法」をとおして「同一性」の圏域外に排除された「多様性」を心に留めようとするアドルノの試みは、また「社会化」の過程で「共同体の内部で権力をもつ人々の声」にかき消された、「内なる異質な他者」たちの多様な声に耳を傾けるための一つの道筋を、私たちに指し示しているともいえるのである。すでに検討してきたミードの「社会的自我論」の文脈に置き換えるならば、「同一性の原理」へと切り詰められたミードの自我論に対して、アドルノが「否定弁証法」の中で提示した「非同一性」の原理を結びつけることによって、従来の「社会的自我論」が見見過してきた、自我形成のうちに潜む別の理論的可能性が見出されるのではないかと思われるのである。それはすなわち、アドルノが洞察しようとした「非同一的なもの」の中に組み込まれた「構成的」な要素を、ミードの「社会的自我」のうちに探り出す作業でもある。分析対象となるのは、特定の言語構造という「同一性の強制」から免れうる自我側面、すなわち「I」に関連する領域である。そこに含まれているであろう、「同一性」の原理によっては救い上げることのできない「創造的な潜勢力」を探る作業をとおして、ミードが自我の成立にとって不可欠とした「言語の獲得」、すなわち言語共同体という特定のシンボル世界との同一化を果たす以前の段階においても、他者との〈あいだ〉に広がり、「自我」の形成を支え促す豊かな空間が存在することを、明らかにしていきたいと思う。

3. D.W. ウィニコット と 乳幼児の世界

それでは人間の発達段階において、前-言語的段階にある乳幼児は、いかにして「認識主体としての自己」を確立していくのだろうか⁵⁾。あるいはさらに逆行して問題を立てるならば、そもそも言語段階に達しない乳幼児に対して、「認識主体としての自己」なるものの存在を仮定することが、はたして可能なのだろうか。この問題に対して一つの仮説を提出したのが、イギリス人の臨床的分析家でありまた小児科医でもあるウィニコット (D.W. Winnicott 1896-1971) である⁶⁾。ウィニコットは、前-言語的段階にある最早期の発達過程を、心理生物学的、生理学的な機能分化に基づく単線的な発達過程として捉えるのではなく、他者との相互関係を介したダイナミックな過程として捉えるべきだと考えていた。こうした視点をもたらしたのは、ウィニコットの小児科医としての豊富な臨床経験であった。とりわけウィニコットが着目したのが、発達の最早期に見られる「母子関係」である。そもそも「心的実体としての乳幼児」というものは存在しえない、と考えるウィニコットは、乳幼児の認知的な発達を、乳幼児と彼等の発達を支える「環境としての母親」との相互性の中に探ろうとしたのであった。つまり、ウィニコットは「育児」という母親による心的かつ身体的な活動こそが、最早期の乳幼児の認知的な発達を促す、まさに「母胎 matrix」としての役割を果たすと考えたのである。母親と乳幼児との〈あいだ〉に形成されるいわば相互主観的に拓かれたこの共同空間を、ウィニコットは「可能性にみちた空間 potential space」と名付けている。そこは、乳幼児

にとって様々な原初的な体験が促され、また創造性が育まれる場である。したがって、乳幼児の「主体」としての認識作用、すなわち「こころ」の原型もまたこの空間において形作られるのではないかと、ウィニコットは考えたのであった。「私」と「私でないもの」、あるいは「主体としての自己」と「対象としての自己」、そして「自己」と「他者」。とりわけ興味深いのは、ウィニコットが「可能性にみちた空間」を、こうした相対する認識の原初的な体験を可能とする、いわば弁証法的に拓かれた場として描き出したところにある。次に、母親と乳幼児との〈あいだ〉に形成されるこの空間において、「認識主体としての自己」がいかんにして形作られていくのか、その過程に焦点を絞ってウィニコットの情緒的発達論を概観していきたいと思う。

(1)「抱きかかえる」ということ——肯定的自己認識の基盤はいかにして形成されるか

ところでよく知られているとおり、人間は他の哺乳類と比べて著しく未成熟の状態では誕生する。そのことはまた、新生児が様々な潜在能力を生得的に備えていることを意味している。脳の発達という観点からみるならば、新生児の脳は、彼等が生まれた環境に適合するために変化の余地を多く残した未成熟の状態では誕生してくる必然性があると考えられている。しかしいづれにせよ、誕生後の一定期間内に適切な刺激が与えられないまま放置されるならば、脳の発達が不完全となるばかりでなく、乳幼児の生存自体が危ぶまれる状況も引き起こされかねない。このように、発達の途上にある乳幼児にとって「環境」が果たす役割は、私たちが予想する以上に重要な意味を持っているといえるであろう。ウィニコットはこの「環境」の果たす役割の中に、「母親」の存在意義を見出すのである。ところで生後間もない、いわば絶対的な依存段階にある母親と乳幼児の間には、情緒的な「同一化」が認められるとウィニコットは考えている。この「同一化」を支えるのは、「原初的没頭」と名付けられた、乳幼児の自我に対する母親からの「支持的」な関係である（Winnicott 1960:37-55=1977:32-56）。そしてこの段階を象徴的に示しているのが、ウィニコットが好んで用いる「抱きかかえる holding」という用語であろう。この時期、育児に専心し情緒的に乳幼児と一体化した母親は、乳幼児にとっては「何の欲求も感じられない」ほどに、乳幼児の欲求に共感をもって適応することができるのである。

このようにウィニコットは、自我の発達の最早期において、母親と乳幼児とがまさに「ひとつの単位」を形成していると考えていた。発達の最早期に、「抱え（られ）る環境」の中で母親からあらゆる本能的な欲求を充たされたという体験は、乳幼児に対してある種の「万能感」をもたらすことになる。この原初的な「万能感の体験」は、乳幼児にとって後に安定した自我を確立し、それを維持するうえで重要な心的基盤を提供することになるのである。というのも、最早期の母子関係をおして作り出された「自我を支える環境」は、成長に伴い乳幼児自身の自我の中に取り入れられ、最終的には「肯定的な自己認識」の基盤として、人格のうちに統合されていくと考えられるからである。したがって、ウィニコットにとって「情緒的発達」とは、身体的かつ心理的に母親と融合し、いわば未分化の状態にある乳幼児が、育児を担う母親との「自我支持的」な相互過程から次第に自らを引き離し、母親とは異なる人格を持つもう一つの「主体」として自らを確立していく、その一

連の過程を意味することになる。このようにウィニコットの情緒的発達論は、対象認識とそれに伴う自我の成立をめぐる、発生論的研究としての意義を併せ持つ理論であることがわかる。

(2) 「鏡」としての母親の役割

——「対象としての自我」と「認識主体としての自我」の萌芽的体験

さてウィニコットは、乳幼児の情緒的発達や人格の統合といった観点から、生後5ヶ月から6ヶ月の間に一つの重要な移行段階があると考えていた。この時期、乳幼児の発達にみる最も大きな特徴は、視力の発達である。一般に、生後間もない新生児でも目の前にある「顔」の表情に反応することが知られている。しかし、大脳や眼球構造の発達等を考慮に入れると、実際に乳幼児の視力が安定するのは生後6ヶ月頃とみられている。ところで視力の安定化がもたらす最大の貢献は、なんといっても乳幼児と「対象」との出会いであろう。そして最初に出会う対象は、いうまでもなく乳幼児が日常的にまなざしを向ける「母親の顔」である。しかしこの段階では、対象(=「母親の顔」)はまだ完全に乳幼児自身の「外」に分離されているわけではない。それはなお、乳幼児の抱く「万能感」のもとで、乳幼児自身の延長上に位置づけられ、乳幼児の「主観」が投影されたまま現れる「対象」である。ウィニコットはこれを「主観的对象」と名付けている。

ところで、最初の「主観的对象」となる「母親の顔」は、乳幼児にとって特別な役割を担う「対象」でもある。ウィニコットは、これを「鏡の役割」とみなした。「個人の情緒的発達において、鏡の先駆は母親の顔である」。乳幼児は母親にまなざしを向けている時、「母親がそこに見ている自分自身」、すなわち「母親の顔」に反映した、母親にとっての対象である「自分Me」の姿を見ているのである。したがって「母親の顔」は乳幼児に対して「自己を反射させる」鏡の役割を果たしている(Winnicott 1967b:149-158=156-166)。このようにウィニコットは、母子関係における「母親の顔」の役割を、乳幼児が自らを映し出す「自己認識の端緒」として捉えたのであった。そこには、「対象としての自己(=「me」)」とそれを観察する「認識主体としての自己(=「I」)」との、分化と統合をめぐる、乳幼児の萌芽的体験を認めることができる。これはまた、他者との関係性のうちに自己に対する何らかの規定を見出す、というまさにその意味において、乳幼児の発達段階における、いわば「反省的自我」の萌芽的体験でもあるといえよう⁷⁾。しかし、次第に乳幼児は、そこに見えるものが自分自身ではなく、「母親の顔」であることに気付いていく。このことは、「自分Me」から「自分でないもの not Me」、すなわち外在的な対象の分離が間近いことを示しているのである(Winnicott 1963b:91=1977:104)。

ところでこの頃になると、視覚以外の諸器官の成熟や発達に伴い、それまで中心的な位置を占めてきた視覚の役割は次第に薄れ、代わって「統覚」が重要な役割を担うようになる。以前は感覚的にそれぞれ個別に与えられるに過ぎなかった種々の情報は、一連の脈絡の中で統合されていく。こうして乳幼児は、自分の振る舞いが「母親の顔」を変化させていくことに気付くようになる。つまり彼等は、自分の振る舞いが引き起こす何らかの「意味」を、「母親の顔」の中に「発見」していくのである。こうした経験は、日々の急速な成長をとおして蓄積され、これらを基に乳幼児はさらに

「母親の顔」の変化を「予測」することも可能となるのである（Winnicott 1967b:151-152=1979:158-159）。以上の過程は、前-言語的段階にある乳幼児が母親との関係をとおして意味を理解していく過程、すなわち特定の行為の意味を「生成」し「発見」し、それらを相互に「結び付け」、そして「蓄積」していく過程を示している。このことは、社会的行為の存立基盤である意味の生成過程を、発達論の観点から分析・解明しているという点において興味深い考察であるといえよう。

（3）移行対象の世界——文化的体験を基礎付ける「可能性にみちた空間」

ところで、乳幼児の発達過程を母親の側からみるならば、絶対的な依存段階での乳幼児への「原初的没頭」を経て次第に乳幼児の欲求への適応から離れ、母親自身が自らの独立した存在を取り戻す過程でもある。このように、母親が徐々に乳幼児との間に距離を置いていくことは、乳幼児の自発的な発達を促すうえでも重要な要件となる。とりわけ生後6ヶ月前後は「離乳」が始まる時期とも重なり、母子関係にとってもまた乳幼児の対象認識にとっても、一つの大きな転換期を迎えるのである。さてこの時期に、乳幼児にとって自分自身の延長上にある「主観的对象」を象徴するのは、なんと言っても母親の乳房であろう。母親が乳幼児の欲求にほぼ全面的に適応している段階では、「母親は、実際の乳房を乳幼児が創り出そうとする丁度その場所に、そしてその瞬間に据える」ために、乳幼児は「母親の乳房」を、あたかも自分自身が創り出したような「錯覚illusion」によって捉えている。つまり、この「錯覚」によって成り立つ乳幼児の「万能感」によって、乳幼児は「母親の乳房」を自分自身からは分離しながらもお自分が「創り出し」、またそれを「使う」ことができる「主観的对象」として捉えることができたのである。しかし、離乳期に至って母親は次第に乳幼児から距離をとり始める。ウィニコットによれば、「母親の最終的な課題は、幼児を徐々に錯覚から解放放つこと（Winnicott 1951:15=1979:15）」にある。このように自らが創り出した「錯覚」から解放放たれること（＝「脱錯覚disillusionment」）をとおして、乳幼児は対象の外在性を認識するための第一歩を踏み出すことになるのである。

ところで、乳幼児がこの「錯覚」から「脱錯覚」への移行期に出会う最初の所有物⁸⁾は、対象認識という観点からみるならば、いまなお乳幼児自身の「万能感」による想像の産物、すなわち「錯覚」による産物であると同時に、乳幼児にとって最初の外在的で「現実に属するもの」として現れる。ウィニコットはそれらを、乳幼児にとっての現実の受容に至る、対象認識の移行過程で現れた対象であることから、「移行対象transitional object」と名付けている。しかしまだこの時点では、この対象（＝「移行対象」）を、自らの「錯覚」によって創り出した「内的世界」に属するものなのか、あるいは「脱錯覚」によって対象化された「外的世界」に属するものなのかを、乳幼児自身は明確に区別することができない。また当然のことながら、その区別を求められることもない。このようにして一時期、現実認識を保留された「移行対象」との関係は、乳幼児にとって想像力や創造力を育む貴重な体験の場となる。ウィニコットは、「内的世界」と「外的世界」が交わるこの「中間領域」での体験が、乳幼児がこの先に構築していくであろう「こころ」のあり方、つまり「心的現

実」の発達や、更には成人以降の精神的活動にも大きな影響を及ぼしていくのではないかと考えていた (*ibid.*:19=8-19)。そしてこの「中間領域」こそが、ウィニコットのいうところの「可能性にみちた空間」を形作っていくのである。そこには、「現実世界」と接しながらなお、「乳幼児の万能感と実在への統制力との合体に基づく様々な体験を享受できる」領域、すなわち「遊ぶこと playing」を可能にする、時間的・空間的な場が拓かれているのである。「私には、遊ぶこととは当然文化的体験に先立ち、実際にその基礎を創るものと思えるのである」(Winnicott 1967a:143=1979:150)。このように考えるウィニコットはまた、乳幼児期のみならず、人生のあらゆる段階における「遊ぶこと」の意義を認め、臨床的な分析技法のなかにも「遊び」の可能性を追究し続けた分析家でもあった。そこには、フロイトの精神分析理論が、幼児期の心的発達を性的欲動に基づく本能的衝動(=Es)の領域へと収束させようとしたのに対して、母子間の情緒的な分離過程に始まる「遊ぶこと」の中に「こころ」の起源を求めようとする、ウィニコットの独特な人間観が示されている。このように、「遊ぶこと」の中に、人間の自由な精神や創造性を生み出す根源的な意義を認めようとするウィニコットは、近代社会における「遊び」の理論的分析を試みたという意味において、ホイジンハ(Huizinga 1872-1945)やカイヨフ(Caillois 1913-1978)などの系譜につながる存在として位置づけることもできるだろう。

ところでウィニコットがいうように、「錯覚」と「脱錯覚」の〈あいだ〉に拓かれたこの「可能性にみちた空間」が、人生のあらゆる段階に拓かれているとするならば、私たちもまた他者との〈あいだ〉に形づくられた空間の中で、自らが所属する特定の共同体の論理に拘束されることなく想像力をめぐらせながら、あるいはまた様々な創造性を駆使しつつ、新たな可能性を自由に追求する途が、常に拓かれていることになるだろう。そのことはすなわち、「自己」と「他者」との間にある、あるいは「自己」とかつて自己の内から分離、排除された「内なる異質な他者」との間にある、あるいはまた「同一なるもの(=同一性)」と「同一ならざるもの(=非同ー性)」との間にある既存の障壁を排して、「現在のありよう」とは異なる、様々な「他のようにある可能性」を自由に追求することができるということを意味している。このようにウィニコットが描き出すのは、常に「他者」と結びつくことにおいて可能となる、より可塑的で柔軟性を具えた自由な自我のあり方である。こうした視点は、「自己同一性^{アイデンティティ}」といった概念に象徴されるように、「同一性の原理」のうちに収束される従来の「社会的自我」とは異なる、いわば自我論の「他のようにある可能性」を、私たちに示唆しているといえるのではないだろうか。このように、ウィニコットの「移行対象」をめぐる考察は、単に彼の情緒的発達論の根幹をなすだけにとどまらず、自我をめぐる既存の社会科学的認識を揺るがす興味深い視座を、私たちに提示しているのである。

(4) 「万能感」の破壊と「対象」の発見——「主体」はいかにして成立するか

さて、前段階で乳幼児の「万能感」に基づく「主観的对象」として存在していた対象は、発達に伴い次第にその「万能的な統制」の領域外へと移行していく。しかしウィニコットは、対象の外在性が保障されるためには、乳幼児の対象認識においてさらに越えるべき一連の過程が存在すると考

えていた。それは「対象の破壊」、すなわち乳幼児の「万能感」によって創り出された「錯覚」としての「主観的对象」を破壊することである。しかしここにおいてウィニコットが重視したのは、乳幼児自身の体験のなかで対象（＝「主観的对象」）それ自体が、彼の「破壊」にもかかわらず依然として「生き残り」、そして存在し続けるという事実（＝^{リアリティ}現実）である（Winnicott 1968:120-121=1979:126-127）。ここで破壊されるのは「主観的对象」であるが、それは同時に「主観的对象」に投影された乳幼児自身の「万能感」でもある。つまり、自らの「万能感」を破壊することをおして、乳幼児は初めて「錯覚」の世界から解放されるのである。そのことはすなわち、乳幼児が自らの「破壊」から免れ「生き残った対象（＝「外的対象」）」を「発見する」ことに他ならない。こうして乳幼児は、対象を自らとは異なる自立性と固有性を有する外側の世界＝「外的世界」に属するもの、すなわち「客観的对象」として認識できるようになるのである。以上の過程はまた、乳幼児の情緒的発達を決定付ける、自分とは異なる外的存在としての「他者」の発見とも結びついていくことになるのである。

ところで、乳幼児にとって最初の「他者」として認知されるのは、おそらく「母親」であろう。「対象としての母親」の成立は、乳幼児にとって自らを同一化していた母親という、いわば「代理的自我」からの分離を意味するとともに、彼自身の中に統合された新たな自我が実現されつつあることを示している。すなわち、母親を自分とは別の「主体」であることを認識すると同時に、自分とは別の「主体」である母親によって乳幼児自身が「主体」として認識されていく過程をおして、乳幼児は自己意識を持つ自立した「主体」として自らを実現していくのである。ここにはすでに、以前の「万能感」に基づく「独我論的」な世界は存在しない。こうして「主体」であることを相互に認識しあう、まさにその体験をおして、乳幼児は相互主観的な存在として自らを確立することになるのである。またこの頃には、「ことば」を使って自らの意思を伝える能力も発達し始め、「他者」との「対象関係」を形作る能力をさらに拓いていくことになるのである。

（５）「環境としての母親」——他者を「思いやる」ということ

ところで、以上で概観してきたウィニコットによる「主体」の成立過程のなかでとりわけ興味深いのは、乳幼児による対象の「破壊－生き残り」体験と結びついた情緒的発達の側面であろう⁹⁾。ここにおいてウィニコットが再度注目するのが、「抱え（られ）る環境」を提供する母親の役割である。母親はこうした乳幼児の「破壊的」な行為に接しても、それをむやみに拒絶することなく、そのまま受け容れる（＝「生き残る」）ことが大切だとウィニコットは指摘する。どのような「破壊的」行為に対しても、常に時間を越えて「生き残る」母親の姿は、乳幼児にとって安心と信頼をもたらす体験となるだろう。これらの体験をおして乳幼児は、自分にとって母親がいかに必要不可欠な存在であるかを感じ取っていくのである。そこに芽生えるのは、母親に対する暖かい肯定的な感情であろう。ウィニコットはこれを「個人が世話をしたり気を配ったり、あるいは責任を感じて責任を持つ、といった事実と関係した」心的活動とみなし、「思いやりconcern」と名付けている（Winnicott 1963a:73=1977:79）。こうしたところの動きを体験することは、同時に必要不可欠な存在である母親

から、どのような場合にも受け止められ受け容れられている自分自身もまた、母親にとってかけがえのない必要不可欠な存在であることを感じ取ることができる、最初の体験ともなるだろう。「思いやり」を持つ能力とは、したがって「本質的に二者関係に属する情緒的発達」であって、相手と自分とは異なる独立した「主体」、すなわち「他者」として認めることにおいて、初めて可能となる能力でもあることがわかる。このことはまた、母親との安定した関係を「他者」一般との関係へと投影できるまでに、乳幼児自身が安定した情緒的発達を遂げていることを示す、一つの指標とも考えられるのである。

人間が持つ不安や恐怖といった感情は、本質的には自己防衛的な本能に根ざしている。これに対して「思いやり」とは、健全な情緒的発達過程にある乳幼児による、他者へと向けられた「こころ」の萌芽であり、それはまたその後の社会関係において、他者を受容するための重要な心的基盤を形成していく。もちろん、心的活動が活発化し「内的世界」と「外的世界」とが分化し始めたとはいえ、まだこの時期には乳幼児の「現実世界」への認識は不安定な状態で、情緒的にも「引き戻し」や「抵抗」が続いている。乳幼児の「心的世界」も、しばらくはこうした不安定な状態に置かれたまま揺れ動いているが、次第に強く明確な「こころ」の輪郭が形作られていくことになるのである。

おわりに——「可能性にみちた空間」がもたらすもの

乳幼児の自我は、母親が提供する環境のなかで発達する。言い換えるならば、発達の初期段階にある乳幼児が具えた成熟へ向けての生得的な潜在能力の実現は、一人の乳幼児に対して気楽に、そして根気よく没頭することができる母親の存在なくしては起こりえない。ウィニコットはこうした母親の機能の中に、時代や文化を越えた、そして母親自身の資質の違いをも超えた普遍的な育児の意義を認めるのである。人間の健全な精神の基盤は、乳幼児期に母親が提供する環境を唯一の「母胎」として形成される。そしてウィニコットが何よりも重視したのは、育児の過程で育まれる母親と乳幼児との前-人格的な信頼関係であり、それに見合うかたちで乳幼児の側に芽生える他者への信頼感であった。このように、最初に出会う「他者」としての母親と乳幼児との関係こそが、時代を越えて個人の様々な能力や可能性を導き出すための「母胎」、すなわちウィニコットのいうところの「可能性にみちた空間」を形作っていくのである¹⁰⁾。乳幼児期に内面化される、この生成力をもった相互主観的な空間は、自己と他者とが形作られる場であり、また意味が生成し構造化される空間でもある。それはまた、他者を受容する心的基盤であり、その後の人生に大きな影響を及ぼす精神活動の土台ともなるのである。ここに私たちは、「同一性の原理」によっては決してすくい上げることができない、社会的な自我の背後に潜む「創造的な潜勢力」を見出すことができるのではないだろうか。ウィニコットはまた、この空間がもたらす創造的、審美的経験が、後の芸術や宗教といった文化的領域における、創作意欲や創造的活動と直接結びついていることを指摘した (Winnicott 1967c:128-139=1979:135-146)。しかしこの空間の中に、私たちはさらに別の意義と可能性とを読み込むことができるように思われる。それはすなわち、「他者」とのコミュニケーションが初めて拓かれる空間、すなわち対話の「言説的空間」に関連する原初的形態としての意義である。

誕生直後からのある期間、母親によって提供された「環境」に基づいて可能となるこの空間は、言い換えるならば、乳幼児自身の成長という通時的な発達軸と、「母親－乳幼児」関係というひとつのユニットとしての共時的な発達軸とが交差するところに生まれる、いわば相互主観的に共有された「受容と合意」の、そして「反省と了解」の領域でもある。「原型」としての空間である限りにおいて、何ものにも拘束されることなく多様な価値観の間を自由に移動することが可能であり、したがってまた、様々に位置を変えながらそれぞれの視座を吟味しつつ全体を構築することが許容されるこの空間の特質は、本来「ディスクルスdiscourse」と呼ばれる思考、ないしは発話状況に含意された特質でもある¹¹⁾。私たちはそこに、ミードが想定した「討議の世界 universe of discourse」や、あるいはハーバーマス (J.Habermas 1929-) が、「近代」における「市民的公共性」の分析基盤として展開している「ディスクルスの理論」と通底する基本認識を、見て取ることができるのではないだろうか。だとするならば、ミードやハーバーマスのように、民主主義のラディカルな基礎付けとして「特定の価値規範の拘束から免れ、また行為間の吟味と調整とを可能とする場」を措定することは、決して理想主義的でもまた特殊理念的な産物でもないことが明らかとなるだろう。ウィニコットの理論に依拠する限り、それは人間の情緒的発達過程において、それも発達の最早期における母子関係をとおしてすべての人々に共有された原初的体験において発現するものであり、したがってその意味では、個人の認識や体験を超えた「普遍的な領域」として位置づけることが可能となるからである。

さてところで、ウィニコットの「情緒的発達論」を以上のように総括する時、この「可能性にみちた空間」のなかに、私たちは二つの今日的な意義を見出すことができるであろう。その一つは、自己とは異なる「他者」や、また自己の「内なる異質な他者」を受け容れることをとおして、自己の内面における矛盾や葛藤、あるいは対立を、自己の「あるがままの姿」として受け容れるための、いわば「自己肯定的な認識」を導き出す貴重な体験の場としての意義である。そして他の一つは、異質で多様な、そして時として相対立する価値観が共存する現代社会において、「同一性」の論理のもとで分断と排除とを繰り返すのではなく、様々な可能性を許容しうる論理を、すなわち「現在のありよう」とは異なる、様々な「他のようにある可能性」を許容する論理を導き出すための、重要な認識の基盤としての意義である。過剰なほどの「もの」と情報とがあふれる現代社会にあって、ともすれば私たちは自己の欲望を制御する術を見失い、不安に駆られたまま、自己と「同質」な世界へと引きこもろうとする傾向にある。また「グローバル化」と称されるこの社会では、執拗に「異質な他者」たちがあぶり出され、社会的な分断と同化、統合と排除とが繰り返される結果、人々の閉塞感はますます深められているようにも思われる。他者との〈あいだ〉に拓かれ、また他者との〈つながり〉を介してあらわれる自由な想像力と創造性との空間を、私たちはいま、どのようにして取り戻すことができるのだろうか。

【註】

- 1) 1875 年には現在のドイツ社会民主党 (SPD) の前身となるドイツ社会主義労働党が結成され (1890 年に改称)、帝国議会に多くの代表を送り込むなど、留学当時のドイツでは社会主義政党による活発な政治活動が繰り広げられていた。
- 2) ミードは自己反省を担う「内省的自我」の存在もまた、「他者に対する働きかけが自分自身のうちに反応を引き起こさせるもの」として、もうひとつの「me」である (Mead 1913:145=1991:7) と結論付けている。
- 3) この点に関連して、クロスリーはミードの自我論とメルロ=ポンティの理論とを比較し分析検討を試みている。詳細は以下の著書、とりわけ第三章と第四章を参照 (Crossley 1996=2003:98-181)。
- 4) ミードの主張は J. ハーバーマス等と同じく、法治主義と立憲主義とに基づく、いわゆる「討議的民主主義 discursive democracy」の立場と合致するものである。その意味ではミードはまた、今日の「ラディカル・デモクラシー」の源流に繋がる思想家とみることができであろう。
- 5) 社会科学の領域では一般に、「自己 self」と「自我 ego」とを区別して用いる場合が多い。しかしこれらの厳密な概念区分は、乳幼児の特質を分析するには適応が困難となる。また、精神医学や精神分析の領域では独自の訳語が当てられるケースも多い。以上の理由から、本稿ではこれらの用語については、厳密な区別なく使用している箇所がある。
- 6) ウィニコットは、精神分析における「対象関係論学派」の基礎を築いた分析家の一人として知られている。彼は 1923 年、小児科医として活動を始めるのと相前後して精神分析家としての資格を取得し、その後メラニー・クライン (Melanie Klein 1882-1960) からの影響下で乳幼児の心的分析に着手することとなる。詳細は、小此木 (1985) を参照。
- 7) いうまでもなく、自我論との関連では多くの「鏡像関係論」が提出されている。とりわけ精神分析の領域ではラカン (Jacques Lacan 1901-1981) による「鏡像段階論」(1949 年) が名高いが、それらの中にあってウィニコットの考察は、他者との関係性を媒介とした自我形成の最早期における分析である点で興味深いものとなっている。
- 8) これらは、具体的にはやわらかい玩具や人形といった、感触としては「母親の乳房」を想起させる対象物である。
- 9) ウィニコットは、乳幼児による「破壊」への欲求を「攻撃的な衝動」と結びつけるのではなく、その肯定的な意義を積極的に認めるべきだと考えている。
- 10) 従ってウィニコットの分析には、部分的にはあれユング (C.G.Jung 1875-1961) の「元型論」との親近性が認められる。
- 11) 「ディスクルス dis-course」とは本来、「広範にわたって自在に移動しながら意見を交換する」という意味である。

【文献】

*引用に際して、邦訳書の訳語には必ずしも従っていない。また内容を明確にするため、[]内に適宜言葉を補った。

Adorno Th.W., 1951, *Minima Moralia—Reflexionen aus dem beschädigten Leben—*, Suhrkamp Verlag,

- Frankfurt am Main (＝三光長治訳, 1979, 『ミニマ・モラリア 傷ついた生活裡の省察』法政大学出版局.)
- , 1966, *Negative Dialektik*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main (＝木田他訳, 1996, 『否定弁証法』作品社.)
- Crossley N., 1996, *Intersubjectivity: The Fabric of Social Becoming*, London: Sage (＝西原和久訳, 2003, 『間主観性と公共性 社会生成の現場』新泉社.)
- Mead G.H., 1912, "The Mechanism of Social Consciousness." *Journal of Philosophy* 9:401-406. (in: *Selected Writings* 134-141) (＝加藤、宝月編訳, 2003, 「社会的意識のメカニズム」『G. H. ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房.)
- , 1913, "The Social Self." *Journal of Philosophy* 10:374-380. (in: *SW*:142-149) (＝船津、徳川編訳, 2003, 「社会的自我」『社会的自我』恒星社厚生閣.)
- , 1925, "The Genesis of Self and Social Control." *International Journal of Ethics* 35:251-277. (in: *SW*:267-293) (＝船津、徳川編訳, 1991, 「自我の発生と社会的コントロール」『前掲書』.)
- , 1929, "National-Mindedness and International-Mindedness." *International Journal of Ethics* 39:385-407. (in: *SW*:355-370) (＝加藤、宝月編訳, 2003, 「国の精神化と国際社会の精神化」『前掲書』.)
- , 1929-1930, "The Philosophies of Royce, James, and Dewey in Their American Setting." *International Journal of Ethics* 40:211-231. (in: *SW*:371-391) (＝加藤、宝月編訳, 2003, 「アメリカ的環境との関連における、ロイス、ジェイムズ、デューイの哲学」『前掲書』.)
- , 1930, "Philanthropy from the Point of View of Ethics." in: *Intelligent Philanthropy*, edited by E. Fans, F. Laune, and A.J. Todd, 133-148. Chicago: University of Chicago Press. (in: *SW*:392-407) (＝加藤、宝月編訳, 2003, 「倫理学の観点から見た慈善」『前掲書』.)
- 長尾真理, 2005, 「前言語的世界の探究—D. W. ウィニコットの「情緒的発達論」をめぐって—」『哲学』第 113, 三田哲学会.
- 小此木啓吾, 1985, 『現代精神分析の基礎理論』弘文堂.
- Schweppenhäuser G., 1996, *Theodor W. Adorno zur Einführung*, JUNIUS Verlag GmbH (＝徳永・山口訳, 2000, 『アドルノ 解放の弁証法』作品社.)
- Winnicott D.W., 1951, "Transitional Objects and Transitional Phenomena," in: *Playing and Reality* (=PR) (London: Routledge, 2005, 1-34) (＝橋本雅雄訳, 1979, 「移行対象と移行現象」『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社.)
- , 1960, "The theory of the parent-infant relationship," in: *The Maturation Processes and the Facilitating Environment* (=MPFE), New York: International University Press, 37-55 (＝牛島定信訳, 1977, 「親と幼児の関係に関する理論」『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社.)
- , 1963a, "The Development of the Capacity for Concern," in: *MPFE*, 73-82 (＝牛島定信訳, 1977, 「思い遣りを持つ能力の発達」『前掲書』.)
- , 1963b, "From Dependence towards Independence in the Development of the Individual," in: *MPFE*, 83-

- 92 (=牛島定信訳, 1977, 「個人の情緒的発達にみられる依存から独立への過程」『前掲書』.)
- , 1967a, “The Place Where we Live,” in: *PR*, 140-148 (=牛島定信訳, 1979, 「私たちの生きている場所」『前掲書』.)
- , 1967b, “Mirror-role of Mother and Family in Child Development,” in: *PR*, 149-159 (=牛島定信訳, 1979, 「小児発達における母親と家族の鏡としての役割」『前掲書』.)
- , 1967c, “The Location of Cultural Experience,” in: *PR*, 128-139 (=牛島定信訳, 1979, 「文化的体験の位置づけ」『前掲書』.)
- , 1968, “The Use of an Object and Relation through cross Identifications,” in: *PR*, 115-127 (=牛島定信訳, 1979, 「対象の使用と同一視を通して関係すること」『前掲書』.)

(ながお まり 慶應義塾大学文学部)